コラム

シニアアンサンブルのための楽器知識

〔6〕シンセサイザー

これは20世紀文明の産物です。広くは合成装置の意味で、正確にはミュージックシンセサイザーと呼ばれます。用途は2つあり、1つは音を合成しながら独奏や合奏で使用する演奏型の装置と、もう1つは喜多郎のシルクロードのテーマのように1人の作曲家が楽曲を多重録音などによって合成してゆく制作型の装置です。
1950～60年代にアメリカのオールソンやモーグによって開発され、当初の真空管による巨大な容積から半導体による集約化が進み、長足の進歩をとげました。
1980年代には喜多郎や冨田勲氏の音楽が爆発的なブームとなりましたが、その後、フルートやヴァイオリンなど生楽器の良さが見直され、ブームは下火になりました。しかし現在でも演奏用に、制作用に活用されているのはご高承の通りです。
演奏用には100種類以上の音色が予めセットしてあり、奏者の好みによってそれぞれの音の立ち上がりと減衰、明暗など変更ができる点に大きな特徴があります。現在の市販価格は1台20万～40万円程度です。

〔7〕電子キーボード

シニアアンサンブルの中にはキーボード（以下Kbと略す）を担当する人が多く見られます。私たちがKbで想定するのは、61鍵の1段鍵盤でポータブルであること。音色が100種類以上変化できるのでシニアアンサンブルではオーボエ、ファゴットほか何の音色でも担当できるのでオーケストラのように音色が多彩になり、有難い存在としてです。

★ 電子キーボードの歴史 ★

従来、家庭、学校、教会で使用された電子オルガンは3段鍵盤で、据え置き用でしたが、1970年代にこれをコンパクトなポータブルにして36鍵程度の1段鍵盤が、カシオやヤマハから発売されました
価格も1～2万円と安価なために人気を博しましたが、音質や音量、音色数はイマイチでした。その後、これらを改良、デジタル化しグレードアップした機種も発売され、61鍵で音色も100種類以上で、オートリズムやプリセットもできるなど、充実した電子キーボードが発売されるようになりました。
　ヤマハではポータトーンとブランド名をつけていますが、私たちが使用しているのはこの中高級モデルが多いようです。価格帯は5万～10万円、別にスピーカーを取り付ける方が多く見られます。

★ Kbの操作が上達するために ★

Ｋbを担当する人は以前にピアノや電子オルガンを経験した方の他に、初めて楽器に挑戦してアンサンブルに参加される方もおられます。
Ｋbは一段鍵盤の片手びきのため、一見やさしそうに思われがちですが、アンサンブルの中で鍵盤、楽譜、指揮者を交互に見ながら独奏するのは意外に難しいものです。初めての方はエレクトーン教室などで演奏の基本を教えて頂くのもよいと思います。又、楽器のメーカー、機種によって取り扱いも異なるので、奏法の他にメカに精通しプリセット、効果などよく慣れておくとよいでしょう。

★ ポータトーンへの提案 ★

現在、市販されているポータトーンは全て個人向けでアンサンブル用ではありません。例えば内蔵スピーカーは上向きで小さいのでアンサンブルではフォルテが物足りない場合が多く、別のスピーカーに接続したり、不要な音色やオートリズムなどかえってユーザーには不便な場合が多いようです。音色の質は中高品と同等にして過剰な機能の搭載を省略した“合奏用電子キーボード”の制作を期待していますが、一般の需要数が少ないのか発売するメーカーがありません。将来を注目しています。

完